



近世說美少年錄

一編

五

1299  
108





刊田

近世説美少年録第二輯卷之五

東都 曲亭主人編次



第十九回 茂林社小悪少捕らば  
三石城小叔侄再會せ

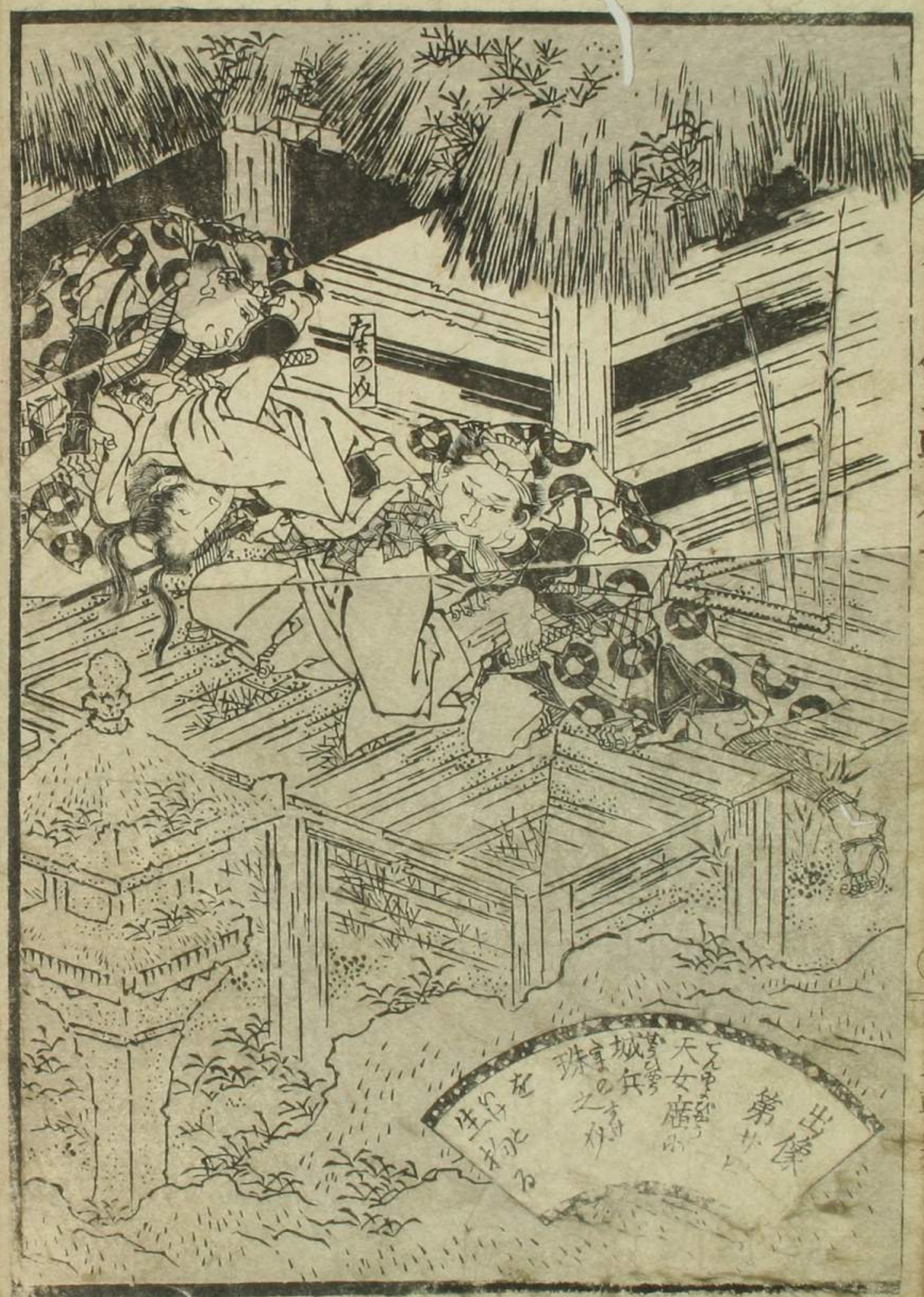
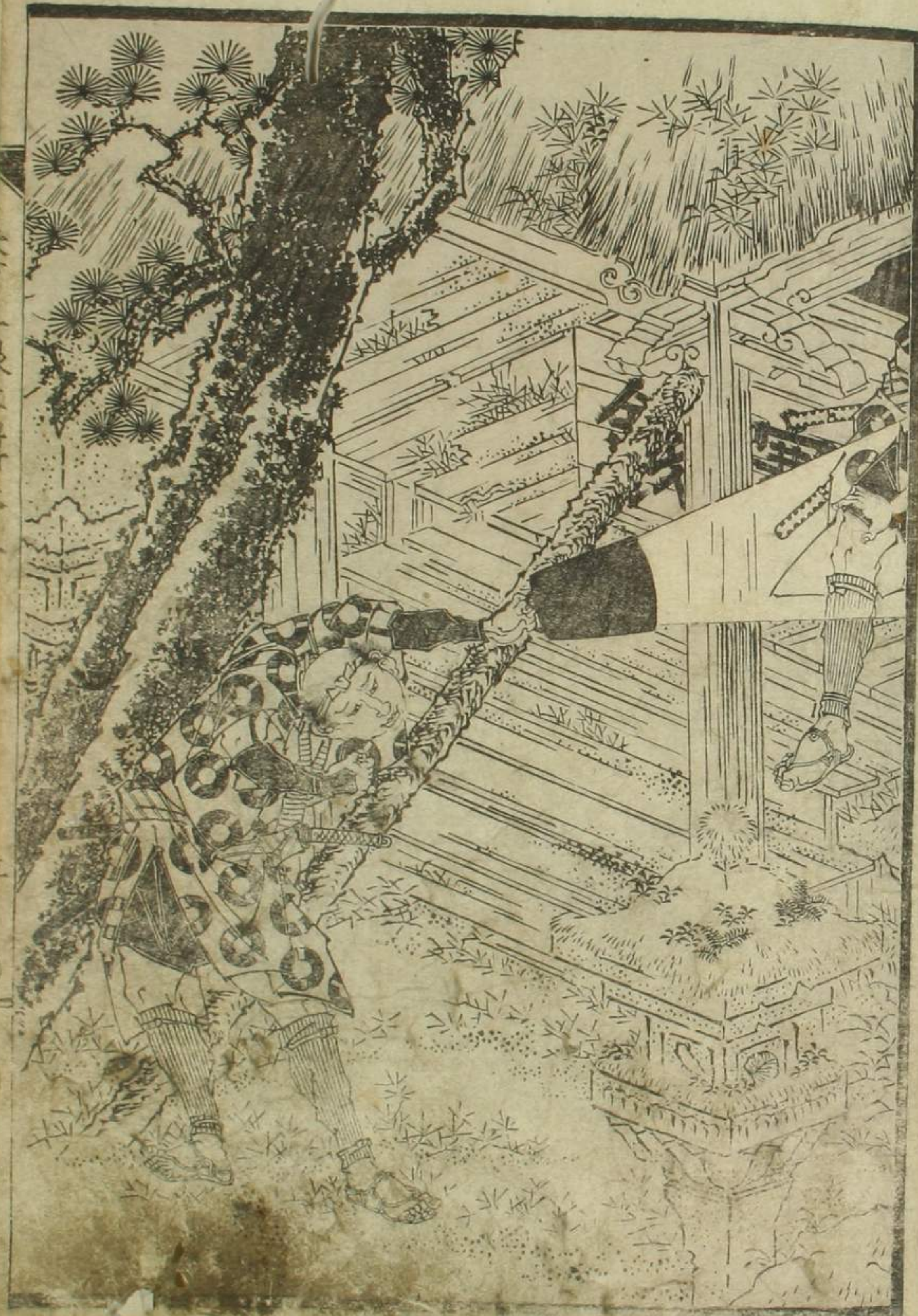
再説末松珠之次の御小危窮ふ及び折脱れ難は大洋へ身を捨てて  
浮む瀬のおれ荒磯小流を寓く死するを知らぬ人も遇む言向ん浦の  
甘屋のもろやが覚束さくも仙々くゆく幾十町を知らぬ夜を最く  
深たる比前路遙小燈火の光隠々とをえそ幽之原来那首小人の住むら  
覚一宿りを投めて一椀の飯を乞ふ地方の名も向ふと足へ疲勞れ  
足も進まぬ仙々若くあまを人の家ありを茂林の中ふと暮  
たる社小点せし常夜燈の樹の間を漏りてを守る人もあられ



近つて月光小且その檐を瞻仰す。辨才天と書ける。白字の匾額ありける。あ  
この社の造りも皇國の神社佛閣異なること多し。あも猶外嶋ありける。  
みるに。ちや。庭を。建てる。籬子。推ひ。進。入。共。合。當。を。商。腹。摠。  
持能與辨才天。窮厄を救せんと。數回祈念して。又。彼。此。と。足。す。神。戸。帳。の  
ほとり。献。供。一。土。器。の。夏。桃。と。野。荒。の。啖。残。一。枚。の。餅。あり。久。く。餓。く  
堪。ど。り。ふ。と。死。物。ゆ。つ。と。遽。く。卸。し。て。是。を。食。ふ。日。來。の。美。味。味。飽。り。も。あ。る  
時。何。ま。れ。比。甘。く。夜。と。あ。る。れ。に。要。時。も。置。を。早。小。盡。と。聊。饑。を。凌  
び。坐。し。と。曉。を。俟。程。小。さ。る。思。惟。る。あ。ら。と。乾。淨。を。茂。林。の。中  
ゆ。あ。れ。も。神。前。の。供。物。あ。り。常。夜。燈。を。置。れ。と。あ。り。人。家。は。遠。く。あ。ら。る。食。の  
詰。り。人。も。あ。ら。ず。天。も。明。か。そ。う。小。到。り。て。哀。生。告。る。情。あ。り。人。の。次。員。あ。ら。ず。あ。ら。る。あ  
せ。と。尋。思。す。身。小。る。彪。脚。を。拂。ひ。の。果。の。動。き。隨。の。疲。勞。と。熟。睡。を

あ。り。け。り。浩。外。の。夜。行。の。雜。兵。兩。三。名。非。常。の。備。の。為。多。く。あ。り。夜。城。外。の。村  
落。を。彼。此。と。ち。巡。り。さ。す。の。案。件。の。辨。才。天。の。社。の。傍。に。あ。る。程。小。の。計。比  
聲。せ。と。忽。地。の。響。つ。り。怪。し。と。多。く。立。上。り。と。准。備。の。燈。罩。を。あ。ら。果。一  
箇。の。少。年。熟。く。睡。と。あ。り。け。り。原。來。癖。者。と。い。は。れ。脱。し。せ。と。潛。り。戸。を  
開。け。と。去。り。と。押。へ。索。を。ひ。け。り。珠。之。女。の。姿。も。雜。兵。は。綁。め。ら。れ。と。何  
れ。の。ふ。と。あ。り。の。且。駭。死。且。呆。れ。と。夢。を。見。苦。し。の。不。快。の。聲。を。あ。り。て。人。々。術。志  
あ。る。某。犯。せ。罪。あ。ら。ず。と。叫。ぶ。聲。で。異。口。同。音。の。這。倫。兒。が。悍。々。と。面。の。色。の  
由。れ。と。年。の。似。け。る。膽。太。は。癖。者。の。あ。ら。る。守。り。人。も。皆。里。邊。の。茂。林。の。中。に。古  
社。を。臥。所。の。と。熟。睡。と。せ。り。抑。汝。何。外。の。人。と。い。は。れ。と。同。る。珠。之。女。の。實。を  
告。難。と。それ。と。あ。り。一。句。も。出。ず。黄。葉。を。詠。り。啞。子。の。似。て。只。唇。を。動。し。暗。を。暗。  
の。ま。り。け。り。雜。兵。は。冷。笑。ひ。と。の。身。の。出。外。の。あ。ら。る。同。語。





出第  
天女  
城兵  
珠之  
生



者おあらんを誘城中牽引の還り。御謝断任事らん。おまゝと  
 詰み合共侶も程小途の天の明る。却説件の雑兵ホの珠之次を牽引  
 して。緋云云と告えあげ城主の出入候ける。其の生半くも言又  
 けれの城主との稍果。未の比の珠之次。河注所の坪の内牽入を  
 雑兵ホの珠之次の曉。茂林の辨天の社。捕縛する。緋の趣  
 猶又具述け。城主の領を。をれ癖者と呼ひ。珠之次を右見  
 入のその貌を。邪正を定め。けられ。只の容止の美。此の身  
 賤の何の故。夜を。古廟の中。獨臥する。抑當國入の。又他  
 よる来つもの。身の素生姓名。生口。と志を。故郷の  
 沈吟たる。頭を。御説の。在下の。富國の。故郷の  
 某村ある。二親を。喪ひ。身と。一。其の

浪速の浦より便船を。遙げ浪路。程の暴風。舟の船碎け。皆大洋の  
 沈折。在下の幸。小板子。潮の任。流れ。洪波。打揚られ。地の  
 浦。寓。一。息絶。ゆ。又幸。小。魁生。四下。其の  
 其処。何國。と知る。人。あ。月。燭。幾。十。町。来。疲。勞  
 此。樹。間。社。小。憩。ひ。る。要。時。目。睡。る。程。小。野。兵。連。小。怪。れ。れ。搦  
 捕。られ。ゆ。在下。素。より。犯。せる。罪。衣。の。濡。れ。と。乾。れ。と。潮。氣。耗。せ。る。月  
 湿。れ。り。證。小。賢。察。あり。免。さ。る。と。う。び。げ。小。実。語。虚。説。ら。雑。て。衣。告  
 せ。ら。ち。城。主。の。頭。を。ち。挿。入。水。の。あ。れ。か。ま。れ。搦。て。は。か。り。趣。実  
 小。胡。論。之。愚。を。稟。せ。る。と。同。く。珠。之。次。推。返。し。御。説。の。ゆ。い。と。も。の。て。る  
 詐。詭。と。し。あ。げ。幾。遍。問。せ。る。と。も。外。の。情。由。の。ゆ。い。と。の。せ。も。敢。て。声。を。さ。し。信  
 奴。甚。大。膽。を。の。舊。里。の。近。江。る。某。村。の。父。母。を。喪。ひ。身。の。と。る。死。隨。其。終。の



由縁を訪んと。渡海の便船せしめる。賤民の孤中を難義の旅する。身みのさる相応ゆき上り練の軍衣膚小著し。越後府の襦袢にたてあつた。と形状と齟齬せし。是詭言の明徴。憶ふ敵の及同者然らば。別情由の。今飽まよ。歐懲さる。つと実を吐く。其奴は台を當と。烈下。知ぬ難兵ホの美り。と心も果ぞ左右齊一珠之双を引捕へ。推俯く。答揚く。三十皆をのり打ち。珠之双の皮破る。肉は苦痛の堪む。細る声と。隣。中をあひひん。答を放へ。と叫べ。と雑兵ホの引起し。推居る。登時珠之双の息を吻死。跪せ。又上座あり。對ひ。の地と何國と。知らざる。後難。一旦欺死せし。賢察の明る。鏡小向より異る。果へ。も。心や実交を告げ。下。末松氏珠之双と。年十六。侍。官。領高國入道の權臣でひ。香西四郎左衛門尉。盛の身邊近。使れて。年未

京師小ひひ。介する。元盛の阿波使と兼。彼地赴。て。在下。小。俱せられ。船を尾崎に返せ。折元盛逆謀あり。と入。詭言せ。れ。數百の討兵を。差向られ。陸舟も寄せ。船中。主後九百名あり。討捕られ。ひ。折。在下。す。海舟飛入。て。脱れて。の地へ流寓。する。の。趣。向。せ。小。違。は。一。旦。詭。ひ。ひ。の。所。亦。管。領。の。御。方。の。城。地。を。欲。と。竊。取。り。し。元盛逆謀。する。と。此。の。越。度。あり。と。在。下。る。一。毫。も。預。知。さ。る。な。ら。ば。憐。愍。願。ふ。と。い。ふ。城。主。の。敬。畏。す。原。來。汝。の。管。領。の。權。臣。と。告。え。る。本。西。が。扨。後。の。け。ら。の。則。備。前。州。三。石。の。城。小。と。赤。松。家。臣。の。采。邑。を。れ。故。管。領。澄。元。給。ふ。舊。姻。の。好。ま。り。知。ま。先。君。赤。松。政。則。朝。臣。の。後。室。勝。元。朝。臣。の。息。女。を。洞。仙。院。尼。即。是。か。れ。高。國。入。道。の。送。恨。を。あ。れ。親。や。ま。さ。れ。件。の。元。盛。民。を。虐。し。極。め。倭。者。を。と。人。傳。の。豫。て。守。る。の。も。あ。れ。滅。亡。の。事。も。亦。そ。の。非。也。

三石太  
平記播  
磨とい  
重編三  
統詔小  
備前  
て姑後  
説小を  
の















大。苦。死。客。宿。せ。せ。の。あり。その。の。泣。か。告。ま。ら。ん。仙。の。う。の。比。の。親。の。苦。勞。の。年。  
 長。て。傳。へ。る。る。る。ら。あ。ん。身。が。猛。山。口。と。も。返。さ。れ。ぬ。一。年。の。秋。家。尊。と。異。母。の。女。  
 兄。又。非。命。の。あ。の。世。と。去。り。た。る。是。より。後。近。江。の。福。富。と。の。片。山。里。の。真。愛。感。目。を。送。り。  
 た。母。の。艱。苦。吾。侪。の。こ。の。首。の。の。箇。様。々。と。木。偶。々。の。山。首。の。阿。夏。の。余。  
 思。ひ。死。の。比。皆。省。略。せ。り。の。こ。も。大。丈。次。の。情。を。年。來。那。首。の。養。れ。る。そ。こ。の。の。る。  
 送。も。多。く。周。防。の。客。宿。の。盤。纏。竭。て。困。窮。至。極。を。り。折。料。を。辛。踏。无。四。郎。の。環。  
 正。の。以。資。を。以。て。母。子。京。師。の。伴。を。阿。夏。又。无。四。郎。が。故。郷。へ。還。る。小。伴。に。陸。奥。の。家。  
 卦。の。珠。之。の。華。頭。卿。の。愛。顧。の。あ。り。て。京。師。の。單。の。職。原。諸。礼。を。見。習。や。且。彼。  
 卿。の。仕。程。の。香。西。元。成。衆。親。類。を。せ。り。て。又。その。家。の。仕。へ。る。の。幾。條。の。長。の。諸。礼。  
 始終。を。漏。さ。ず。増。さ。ず。周。防。の。一。段。の。今。を。ご。く。辭。を。連。ね。て。の。あ。れ。か。告。  
 阿。夏。房。の。皆。く。支。毎。の。或。の。驚。馬。の。或。の。感。で。且。歎。息。ま。す。と。半。响。の。う。り。又。死。の。心。

稍。釋。之。憐。む。一。木。偶。々。小。夏。の。山。家。の。の。あ。け。ら。れ。て。命。を。ご。く。な。り。け。り。は。是。  
 よ。の。後。阿。夏。の。艱。難。の。情。の。身。を。寓。せ。爾。と。守。も。育。る。數。年。の。苦。勞。然。ぞ。  
 あ。ん。加。以。周。防。を。母。子。諸。來。一。甲。斐。の。あ。り。も。あ。り。入。信。の。計。音。の。折。の。  
 心。中。今。あ。ん。の。汲。の。の。彼。室。津。海。の。千。仞。の。底。の。數。の。さ。り。の。那。地。の。在。る。  
 ら。の。面。會。憚。あ。り。も。左。も。右。も。と。取。ら。せ。ぬ。悔。て。返。ら。ぬ。の。多。く。其。麻。の。屋。の。循。  
 來。て。活。を。殺。一。三。宗。り。け。ん。あ。の。あ。れ。も。幸。ひ。辛。踏。氏。再。會。と。伴。せ。は。あ。り。  
 う。阿。夏。の。其。外。の。と。ま。と。定。め。渠。の。故。郷。へ。赴。死。の。事。の。情。を。猜。を。本。意。の。  
 あ。ら。下。の。あ。り。の。木。偶。々。の。別。れ。より。十。稔。の。事。の。艱。苦。毎。々。久。に。宮。本。の。  
 穉。見。を。守。育。の。兵。房。の。な。も。あ。り。べ。や。れ。ぬ。せ。ん。と。あ。い。の。空。に。ま。り。と。よ。の。産。死。  
 た。る。身。の。ま。る。再。縁。と。結。び。け。ん。情。義。の。疎。と。の。く。ら。に。那。无。四。郎。を。り。其。舊。  
 友。永。止。の。比。深。草。ゆ。心。あ。り。と。よ。ま。あ。れ。の。竟。の。身。を。任。け。ん。是。も。亦。の。あ。れ。







修理全  
朝與全  
郎朝長  
兄弟朝補  
朝寧の子  
扇谷の名  
迹藏藏別  
入向郡河  
跡の城主  
天文六年  
買日卒

かとうは。とどひ。任のあひま。追遣のあはる。を遠離る。武士の受理公  
道人情。両方。全う。愛惜せん。或ひ。必しも。はれも。只今。也  
相別る。雨。久後。心。ぬらぬ。東國。薦遣。仕官。の途  
故。管領。憲実。ぬら。主君。身を。寓せ。長門。の深川。を。せ。は  
比世。遊り。ひ。は。内縁。今。鎌倉。の。西。管領。も。兵房。ある。知。せ。ら  
就中。扇谷。朝與。朝臣。の。藩中。也。年来。相識。者。多。那家。や。衰へ。く  
今。武藏。と。上野。を。所領。不。過。され。武。の。河。踰。在。城。と。は。北。條。家。を  
戦。ひ。あ。り。然。け。れ。も。舊。家。を。世。々。管領。の。貴。族。を。関。東。の。武士。に。彼。と。志。を  
運。ぶ。の。少。う。と。は。え。り。ぬ。れ。又。遠。く。を。鎌倉。へ。還。住。と。威。勢。舊。家。如。く。あ。ん  
よ。う。て。雨。と。知。介。と。河。踰。遣。走。朝。與。朝。臣。と。主。と。憑。を。名。を。揚。家。と。與。一  
ね。が。か。れ。又。今。よ。う。と。東。西。千。里。の。別。れ。あ。る。れ。相。見。ん。と。輒。く。就。て。敬。言。む。元

数。人。條。も。され。た。と。雨。を。え。る。容。止。難。く。世。の。美。日。た。り。と。生  
涯。を。徳。と。行。き。ま。り。これ。亦。その。身。の。不。幸。と。又。雨。能。精。也。頭。智。不。覺。也  
と。念。ひ。辨。見。徳。の。言。之。黙。と。徳。情。不。如。才。也。の。自。負。と。行。状。宜。い。り  
さ。り。又。雨。の。周。八。の。才。の。美。多。も。驕。且。と。さ。る。その。餘。を。不。足。と。し。雨。主  
も。え。盛。も。驕。且。と。さ。る。忠。義。の。政。也。の。る。け。那。城。と。及。ぶ。も。雨。も。れ。る。習  
も。會。ひ。驕。と。賢。と。あ。り。一旦。權。と。執。も。あ。り。又。一。世。の。浮。薄。を  
る。の。色。好。三。任。を。愛。と。恥。と。あ。り。故。れ。は。任。疎。り。礼。見。貴。賤。を。序。は。曲  
尺。一。分。の。則。寸。及。び。二。寸。の。亦。尺。及。び。三。寸。の。多。を。う。え。ま。り。今。浪。守。る。べ  
か。い。の。人。も。これ。亦。少。く。時。行。く。も。時。の。初。心。免。さ。る。と。改。め。を  
何。の。益。も。あ。り。を。壁。の。嬾。樹。の。幹。細。く。る。麻。を。つ。く。如。その。樹。大。なる。と。た  
亦。隨。と。大。き。なる。と。あ。り。の。時。の。徳。と。改。め。る。の。徳



出像第二十五

皇天豈給  
意中秘  
白刃難割  
骨肉情  
驚齋









文字の表せの這名も羞て行状を慎め。と解示と書翰の黄白如干函を  
そ添て取せし珠之の受戴せし坐る感涙の進むを林のあま御慈愛深  
御洪恩仰謹てうけなむの胆銘に宗勤を忠勤と換て入憾らう路  
遠くと訪問容易なるべし願わ自愛あひてよといふ奥房飲びくあらん  
永安堵の入りし見まへをく睡て起ると急い立る珠之の受戴  
もの難く別を告ぐ臥房の入りしをの曉々宗那老兵の呼覚し餌と  
薦め客装を整平の両人即珠之の相具く行篋を背肩に笠子と推乃城を  
出東と投ぐ武藏の河踰まを送りゆめりあま奥房の前の宵不竊分  
付たれは是より珠之の姓名を改めく末朱之の晴賢とを名告りけは  
第二十回 享禄の役君臣乱離ま  
鷹捉山の暗賢魔と逐ふ

且説尾崎の城主右馬次尹賢の香西元盛を誅滅しと竊小怨を復せ下後も  
心安らふ所所あり獨り深念をまふ元盛既小口ひれを深き弟波野植  
通柳本園友小口を密謀と知られ難の難義小及小初より件の密謀を  
知りしもの雨箇過ぎを矢野宗好と獄舎小敷登り偷見の那偷見奴の  
欺欺もよく結果けられ後産の病ねども心憎の宗好は過分賞禄を取  
らや小猶もろろの味を功誇する面色を然と知り由断く那奴小口より  
洩される後悔其外小立かすえの禍を禳小不如と腹穢くも思量りく  
竊小毒と餌とせし人あを矢野小告げん宗好の堪馬死心と逐電あま  
迹の埋め丹波の上小赴は波野備前守植通小尹賢が隠匿の顛末元  
盛説死の秘事を送る耳は生口小植通皆て送恨は勝を矢野宗好は留  
措てその身の潜びく京師小赴は弟柳本園友小對面あま緯云云と報知せ

美の二景二景

古



右典厩を以て兄弟の冤家とす勿論されども入道殿高國の後を誣言を  
 信容く亦も罪なき家臣とむて討せしは恨み先や謀反の旗揚しと雖て  
 思ひあはまへし和殿も亦丹波の還りて力を勸せしと薦められし國友大主  
 怨を以て原來の比七枚の折書書と賜りしもの事のおれは然るをも知らず欺れ  
 けきも亦し忠義の兄の枉死を以て易しと云ふも悔しけれ真趣あるを  
 共の覚期仕らんを以て植通還遣し其日漢獵小假托く竊に京師と立  
 退つ神尾の城の盾籠りて兄植通と共に近國の武士を謀り合せ阿波の  
 三好の一味と拮角の勢いと張りし京師の騷動大なる程に三好の  
 前守元長の植通國友の返忠の時を得て去歲の夏四年肆月九日阿波の撫養  
 也の蕪の故將軍義植卿の公達阿波の御曹司義推して大將軍と稱す  
 故主右京大夫澄元の獨子聰明九神を管領するを左界の城將三好勝

時の子勝長ホと先鋒の大將とて阿波讀みの大軍を引卒し京師を望み攻  
 降す道永禪門防びの將軍義晴卿も俱しなりて近江路へ落ておたけり  
 三好ホ即上洛せし阿波の冠者義維の左兵衛督に任せし聰明九も元服の  
 後右京大夫おたけられし晴元と名告りける是より開戦年と累ねて三好が  
 威勢盛なり有如之程に柳本彈正國友も又晴元も昵近きて逆威を振  
 のりし三好が權威も及ぶと媚を晴元も諛言をけり其故も晴元長主  
 後の間睦しむる程に享禄三年六月晦日柳本國友の播磨の依藤を  
 攻ける陣中何の所より知らず寝首を搔れて亡しける其時矢野宗好の所  
 為るべしとのめりて兄弟の植通実事と思ひて矢庭宗好を數り捕りて其  
 誣言を以て咎えし國友との宗好との牙の終りともせしるは是時逆の天  
 也汝の如く汝は返る因果ふととのめりて比高國入道法名道永を改め



下小あせ 享祿四年 末朱之次 武藏野々 大永五年 ありて年 後されも 摩次りの 如きも 正徳の号 ありて前 段大永五

常桓と号せしが頻ふ三好に戦ひ負て後父弟伊賢と俱ふ播磨小赴於浦上  
掃部助宗村を頼み宗村輒く相譚れて播磨美作備前三州の大軍茂  
りて常桓を援け勝ふ衆く晴元を敷き靡け遂に尼崎大物の浦小屯に四圍  
攻んと謀り程小三好元長大軍を起し阿波より推し各々の又宗村が主  
け。赤松二郎冠者政村の年来宗村の權を奪れてを刃有れども如く冠  
履倒し置れる。鬱憤を散え為陽武宗村の加勢と倡てみづ隊兵を  
大物の浦小出陣し。潛り三好の謀一合を。裡所を考う。常桓伊賢宗村の  
只一戦しうち肩を。士卒と共に陣殺を時小享祿四年六月四日。あの敗軍。世  
傳く。大物崩と喚做たり。伊賢宗村が敷かれ折高。團入道常桓は辛く脱れ  
る。その形。紺搦の家小隠れ。敵の雑兵小搜出され。廣徳寺。小材示  
錮られ。ある月の八日。至る。詰腹と切せらる。常桓死す。年四十八。廣徳寺の住

年ののせ つゆのの 下の文如 又三好元 長入道と 海雲号 去るの長 慶至る 晴元を 戦て敗績 將軍義 暗渡り 近江の元 太正徳を 呂のみ後 年ののる 是のの書 小載るん

持理華く法諡と三友院とを稱ける。義維晴元長ホの。話足下は。抑件の一條。世の人の知所。軍記の趣を抄録し。多く亦作意を難む。但高  
團入道と。柳本彈正ホが。支迹。伊賢并小宗好ホが。終る。所天理の昭々たるを  
りて。勸懲の一端と。是又。是作者の用心と。知。一。問話。休題。復説。末朱之次  
晴賢。那老兵ホは。送られ。廿日。あまの。客宿。武藏。州。入。河。内。郡。河。内。村。  
御小著。の。城外。小。旅。宿。を。投。め。夜。裳。を。更。め。後。者。を。宿。中。小。進。入。り。管  
領。扇。谷。修。理。大。夫。朝。興。の。家。臣。某。甲。が。第。小。到。り。陶。與。房。の。書。翰。を。出。す。  
云。云。と。述。て。對。面。を。請。ひ。件。の。家。臣。を。の。意。を。治。て。客。房。小。迎。入。れ。出。外。來。歴。を。問  
ふ。その。ち。後。主。君。小。信。え。あ。げ。小。陶。與。房。が。え。向。く。と。紹。久。あ。る。少。年。を。疑。ふ。は  
の。小。あ。ら。ま。と。與。房。小。谷。遣。し。朱。之。次。と。毎。う。ん。を。留。置。べ。と。命。せ。し。是。小  
よ。の。朱。之。次。が。執。袴。の。望。三。支。敷。正。以。送。り。來。る。老。兵。ホ。の。家。臣。許。諾。の。報。書。と。朱



の子け せうそと ちけ 別れて備前の三石へ還りけり。却説扇谷朝興の  
 之が消息を受とて。未朱之友が月俸を沙汰して且子舎を賜り。公后石山にてこれをさる。艶顔愛  
 走死少年中。進止も疎幽るる。近習の後使して左右近く使れり。有知  
 程小朱之友の言と行ひを慎み。精悍き仕るの事。一松あり。朝興の  
 愛飲びく。禄を増一格と升し。且も左右をさる。折々臥房果して。さる。元  
 元あり。有徳又燕往に雁来ぬ。春秋の事。大永八年。この年。小享禄と改  
 元あり。朱之友の既ふを。十九歳ありたれ。骨太の及。優形を。戦國の習俗  
 也。の。額髪を。剃除を。故の。使れ。出頭して。第一の近習。然る  
 戰場。小扈後。と。軍功あり。ふ。これ。壯園を。賜ら。後。僕。一。兩。箇。と。謀。られて。  
 子舎も。君所の内あり。一日の休暇。を。聊も。着念。を。勤勞。他。事  
 る。を。主。の。老。黨。も。深。い。か。役。の。立。た。の。を。稱。て。憑。り。出。け。り。あ。れ。の。

朝興と有。一日坐邊途。侍。た。朱之友。を。これ。の。年。来。宿。願。を。  
 然。も。縛。の。障。り。多。く。い。ま。あ。れ。を。果。さ。由。り。汝。の。美。と。せ。や。と。問。れ。朱  
 之。友。此。も。擬。議。を。某。め。く。御。武。德。を。某。入。り。千。里。も。遠。く。と。推。參。仕  
 たる。甲。斐。あり。この。親。く。召。使。れ。四。松。の。寵。遇。故。老。倍。と。俸。禄。の。身。小。餘。き  
 どの。い。ま。御。恩。小。報。を。死。一。个。の。功。を。朝。る。る。羞。怕。れ。胸。休。め。は。い。小  
 め。仰。ぎ。け。の。り。の。を。い。ひ。ら。る。幸。な。れ。及。び。か。の。の。の。命。あ。け。て。は。う。ん。仰。子  
 ら。の。の。と。真。実。を。て。ま。る。朝。興。の。歎。び。と。言。下。の。美。諾。奇。特。多。り。予。が  
 宿。願。の。別。義。小。の。毛。裏。小。黙。契。道。徳。と。喚。れ。り。抖。数。行。脚。の。沙。門。あ。り。一。松  
 武。藏。小。飛。錫。も。愚。俗。を。濟。度。あ。る。程。小。貴。賤。帰。依。渴。仰。と。如。來。禪。師  
 と。稱。たり。因。り。予。も。城。中。小。請。待。と。その。説。法。を。聽。聞。せ。り。衣。鉢。飄。然。と。傳  
 燈。白。日。る。如。く。梵。唄。殊。勝。ゆ。て。清。淨。音。塵。俗。の。心。耳。を。洗。淨。せ。り。実。は。是。濁



世の多くは、**値偶**なる人、**人間**未曾有の**活佛**なる、**粵**の**輪**、**心**の**報**の**理**を了悟  
 あり、**思惟**の**家**、**世**の**戰**、**國**の**鹿**、**觸**を、**一**の**方**の**獲**、**鎮**の**敵**を、**殺**す  
 躬方を、**敷**せし、**罪**障を、**量**の、**善**根を、**裁**まの、**生**ての、**子**孫を、**福**ひやく  
 死しての、**奈**落の、**階**の、**入**る、**如**來、**禪**師の、**相**譚、**勝**軍、**地**藏、**大**井、**百**  
**體**を、**造**す、**一**の、**箇**寺を、**建**立せし、**當**身、**清**果、**自**他、**平**等、**子**孫、**敏**慧、**目**の  
 と、**造**る、**禪**師の、**告**ぐ、**造**佛の、**憑**き、**禪**師の、**許**諾の、**氣**色、**脚**情、**願**より、**入**る、**有**漏の、**縁**め、**真**實の、**功**  
**德**あり、**一**の、**寺**を、**建**立せし、**一**の、**佛**を、**作**り、**德**を、**布**て、**民**を、**愍**み、**仁**哉  
**施**して、**改**と、**正**と、**殘**の、**勝**殺、**去**す、**公**道、**私**慾、**首**を、**斬**り、**身**後、**中**を  
**升**天の、**教**あり、**脚**子、**孫**長、**久**疑、**一**の、**益**の、**所**の、**國**用、**費**て、**民**を、**苦**め  
 む、**一**の、**願**、**教**化、**せ**られ、**道**理、**感**服、**且**、**止**り、**禪**師、**を**

東國を去る、今の吉野の山脚、六田川の上、**甘**泉を、**締**み、**行**ひ、**澄**と、**なる**  
 よ、**風**の、**便**り、**吹**え、**あ**を、**と**り、**又**、**思**ひ、**禪**師の、**教**化、**尊**られ  
 る、**聖**人、**あ**を、**れ**、**如**く、**佛**を、**造**り、**寺**を、**建**は、**有**漏の、**縁**なりとも、**あ**を、**為**す、**優**べ、**禪**師の、**許**諾、**容**せ、  
**願**を、**果**さん、**頻**り、**加**梅、**相**摸、**西**の、**南**も、**皆**敵、**地**あり、**往**還  
**能**辯、**奇**才、**の**の、**地**に、**到**り、**主**命、**を**、**智**男、**の**の、**亦**、**障**を、**を**りて、**竊**に、**揮**む、**任**稱、**の**の、**外**、**主**命、**を**、**禪**  
**師**の、**請**ふ、**予**が、**宿**願、**を**、**果**す、**功**績、**莫**大、**賞**の、**宜**く、**依**て、**心**を、**定**め、**言**兼、**入**り、**夢**え、**朱**之、**頭**を、**擡**げ



弱冠未熟の某と人習り思召れまの仰のあふ。縦敵地ふも凡  
霜路の降る所舟車のみ所る。姿を窺一方便をて山をも河をも踰  
す。只心のこる。件の如如来禪師と申え。造佛の義を許容あり。老體  
百里の往還を敷く。菴室を出ぐ。と宣ふ。まゝ。ん。然尊慮奈何。と  
問ま。朝興のゆ。感嘆してこれ初より汝が才幹やあふ。と申ひ。その所  
果と違を禪師の意を納めあり。造佛の義を許され。東國伴ふ  
及。那処の事と初め堂塔も亦彼山の邊あり。建の。より。這  
圓の沙金五百兩と白布二百反と贈遣。造佛の料とせん。餘堂塔建  
立の諸雜費の百驅の佛像成就の比府で齎遣。遣てん。今。の件の金と  
布と吉野も運送せん。道中幾十数の後者と要。も。摠て汝が望。任  
せん。宜政定む。と亦他更も。急れ。朱之及の脱。路。要。時頭。裁

傾け。逆旅の。人数。の。還て人。怪。られ。障。り。ある。の。ゆ。へ。有。徳。布  
と。金。の。韓。樞。二。前。の。ふ。藏。め。と。是。の。早。の。七。八。名。別。の。宰。領。一。名。と。添。れ  
る。絆。足。る。づ。の。ゆ。ゆ。ん。杖。某。の。山。伏。の。峯。入。る。ぞ。打。扮。て。大。約。這。八。九。箇。の  
後。者。を。ぬ。く。路。と。言。ふ。誰。う。怪。ま。く。林。下。に。死。轉。く。那。地。に。到。ら。ん。と。何。の。疑。ひ。か  
ひ。死。の。美。の。却。心。を。言。ふ。と。憚。り。所。も。る。ま。う。あ。ら。朝。興。の。ゆ。大。く。感。ど。速  
微妙。計。す。よ。け。り。む。義。経。の。奥。州。落。も。主。後。山。伏。の。打。扮。て。安。宅。の。関。と。論  
たり。願。ふ。汝。の。今。の。世。の。半。孺。九。の。ま。の。速。く。准。備。と。遠。の。か。首。途  
と。せん。これ。那。首。に。到。る。も。禪。師。の。許。容。の。ま。の。や。一。年。十。箇。月。返。由。ま。る  
と。も。け。ま。の。あ。ら。備。然。時。具。及。び。る。後。者。の。皆。返。と。絆。の。便。宜。を  
と。も。報。せ。脱。落。あ。る。ら。ぬ。も。と。ま。の。進。退。肝。要。は。管。徳。む。と。懇。切  
る。主。命。送。も。る。や。朱。之。及。の。言。兼。り。准。備。の。為。退。け。り。却。説。朝。興。の







勤行 喝食 行 勤行 喝食 行 勤行 喝食 行

ついでに我を念下のめつと朱之双のりもせむを心とせり。北六田と比曾寺の同る山  
捨て言ひけり。然程朱之双の六田川をち渡りて北六田と比曾寺の同る山  
里のゆるぎ詔ふ果して禪師の菴室の里を去ると十町許樹林深閑はり  
あり進近つて且るふ。這柴門の正中の空文の二字と書きたる一枚の牌を  
掛出して裡面より固く鎖したる當下朱之双のりもせり。実に入菴するの外  
よるを鎖を空の内よりせり。空文の虚文也。必人のせり。呼門と  
急せの後者もこの声と合て呼門も且るの心せむ。呼門半响なる  
年十なるる喝食の奥のりもせり。戸節の窓より窺く来る  
のの誰と問ふ朱之双の腹平さ。一入声をせり。東路よりと禪  
師のまをせり。主の使のりもせり。空文の虚文也。必人のせり。呼門半响なる  
あま。原来鎌倉の管領家扇谷朝兵衛の使のりもせり。呼門半响なる

女の渠のりもせり。名をまをせり。知のりもせり。和らげり  
如く甚の朝兵衛の使の禪師の見参せん。為らち教馬のりもせり。喝食  
又答てて師の近屬菴をせり。葛城山の麓のりもせり。這柴門の  
空文の牌を掛して。帰菴の程の測り。東國へ還るものととも聴  
む朱之双のりもせり。戸際身を倚せて。その本意をぬるにせり。禪師の菴の  
在るも。主命の依り千里を辞せり。あまをぬるにせり。呼門半响なる  
還らる旅宿の退く帰菴を候へり。見参入のりもせり。葛城山のりもせり  
登りて。在りて。喝食推林のりもせり。疑ひのりもせり。功のりもせり  
師の山入りのりもせり。或は吉野葛城の熊野高野のりもせり。日も定ぬる  
む。その時西之箇月遅延とせり。一兩年菴のりもせり。何処を投て索  
ぬる。師の折吾侪をえりて。宜ひに近き東國の管領



扇谷朝興の使者末基甲との青侍来訪せん集の尚縁るその速のり  
 去せ集疑なく逗留せの音東國のてん枉難其身の眞縁ることあらん  
 美と傳へてと竊示しあり有徳者たむありのまを果すと空を舞を旋  
 らし奥の入り呼ぶもゆきひしき朱之友のせん生るふ又韓樞と早河を渡  
 きて六田の客店ありければ主人の遠く出迎へて如如来禪師さる御對面  
 ひ飲と回れ朱之友の隠ありて。辯云云と説可き主人の竹の眉を頻りゆ。  
 那菴室の喝食を初より禪師の獨住せのまも他御出させの日の空  
 其井の牌ありの由守ま者なる説するふそのあはれぬふそひ憶ふふの喝食  
 とんえたるも是則禪師さる對面許りてを調へ示しありありとや  
 こそあれのまれ御逗留のふの覚むのくせの未優とありと花実とあり  
 諫めど朱之友の従りてこれ主命と稟するふも禪師の面ををく何処こそ

飲還るべの喝食が禪師さる狐狸の化るる本形のあらん  
 急ふら入く對面せの脱をふりたるあへ。この後者ホとんえの  
 汝達の送代那首のあはれ。日々に菴を窺之。禪師の菴中在りて走り  
 是れは報せの脱を浴をそと分付れ衆皆弁一の意を以て形のごまあ  
 け。有徳程の捌月の過る。玳月中沈みり。禪師の菴ありあり。あはれな  
 旅の寂しみのる。影短く秋の宿降布く木葉木門の霜鄰の山里の谷の松  
 風夜の鹿の声より外の友もる。寤ても寐ても徒然と堪へり。朱之友の懐  
 とく樂まも心類の焦燥く肚裏のあま。これ河路の在り。日の主君と共起臥  
 あり。鄙語の晦知らは錢帛をふ取らねども衣食の餘りあはれ。ふしき使  
 立ちられて客店住いの不樂。さの三の饌も豆腐の薄は蒲團の夜の  
 寒を凌ぎ難るの罪きて配所の月をまよ似る。然るを今あり。又るも還りの











宿山朱之妖射之



美山金二車老三

山後宮

山後宮

山後宮



程ちか大約たいてい五町ごまちありふと何処どこかたけをさるるけり正ただ射やつと良よ物ものもさら  
せしを悔なげけれ精竭せいけつさか必倒かならずたふさは是首飲このころかきこり彼首飲あつちのころかきこりさるるふいふ山深やまふかく入いるを  
覺おぼむゆい朱あけのすけ之の友ともの穉ち時とき深山ふかやまを奔走べんそう走りつゝふの時ときも足逸あしのちや早はや坊ぼく  
二ふた後ごまき陸りくを走はぶ程ちか小こ黄昏こうこん昏くらりて路みちの遠とほかれ朱あけのすけ之の友ともの心こころ憚は  
麓ふもとへ降くだらんと急いそげさる舊来ふるこま一ひと路みちの定さだまるる日ひの暮くれ暮くれの天そら曇くもり出で  
る月つきの光ひかりされ又またのふともせぬ術すべなり頻しばしばふ声こゑをぬりあて坊ぼく二ふた々々と呼よれども絶た  
たせざるの渠みちの麓ふもと侯こうあらんと思おもふ心安こころやすまる素もとより膽いそ太た社しゃ伎ぎる  
ま有あほほけれも物ものも多おほく腰こし小こ著つる囊ふくろより燧ひと半はん火かの鑕くわて落おち葉はと燧ひて  
四よ下くだるるふ彼此あちこち細竹こほしけ多くも是これ究竟しやうきやうと伏ふつるるも執とね蕉せう火かの路みち  
索もとくもけどもくいま麓ふもとのふれもさるる前まへ路みちの石室いしむろあり立たりて熟じやく視しは小  
洞ほら口くち五ご尺しゃく可か奥おくへ入いるに六ろく尺しゃく小過こあむ太古たいく穴居けつこの迹あとの似にたりあの時とき天晴あまはら雲くも斂あ

了しまく隈かみる月つきを瞻あ仰うるふ夜よのたを中なかの小こなりふなり且かつくふ疲つか勞れうと聲こゑと曉あけ  
る又また路みちを索もとく徐あや々あや林はやし麓ふもと下くだるる尋思あやうさる蕉せう火かの振ふ滅め葉はて室内しやうむろ内うち進すす入い  
弓ゆみ笠かさ前まへを側わき引ひつて坐ましてその天あまの明あるを俟まちふ五ご三さんのふとわはれ比ひ遠とほく南みなみに方かたに當あ  
女子むすめの叫こゑぶ声こゑさる朱あけのすけ之の友ともの耳みみを教しむ怪あやむ一夜ひとよの深ふか山やま女子むすめの泣なく声こゑのつら  
渠みち山やま賊たぬきの搔か攪かれぬて来きるるふのふれもさるる果たまと考かんがへるる石室いしむろの賊たぬき  
巢ね穴あなをわらうんぎらぬさるのれはの穴あなあま在ありての便べんり下くだるる前まへ向むかひに  
且かつそのさるるさるるさるる弓ゆみ笠かさ前まへをさる揚あぐ遠とほく室むろより出でたれその声こゑ漸あら  
くさるる何なに処どこかあるさるるさるる室むろの前まへ面めんの小こ松まつ斂ある編ありて間ま遠とほく  
けりけれ走はりつら強つよ衝つ洞ほらと今いまくつと俟まちりける畢はつ竟しやく朱あけのすけ之の友ともの癖くせ者ものを射やつ  
あつて件くだんの女子むすめを拯すぐ不ふ足あしもる第三だいさん輯しやくの初はつの巻まきの解とれ分わかるる俟まちく聽き録りくのし

近世説美少年録第二輯卷之五終 (村田)



○曲亭翁著編近世説美少年録第二輯画工筆研刷人目次

出像

葵岡北溪



浄書

谷倉金

川

割刷

原朝倉喜伊八知

家傳神女湯ゆづりの妙茶茶一包代百銅  
精製奇應丸大一包代五中一包代二小一包代一  
熊胆黒丸大一包代五中一包代二小一包代一  
婦人の妙茶茶一包代五中一包代二小一包代一  
製茶神田明神下 瀧澤氏  
弘所元 瀧澤氏

曲亭老翁讀書研究の餘業として釋史小説と著しての世の婦幼の勸懲をの書今の大二三五土種も元籍る大凡翁の著書の稿本精密なく真名傍訓一初或三十五六字或四十字重なるものありと書画の備子刷人の良きと擇むるものあり翁の意の愜は是疎漏拙劣の刷本の比本房所用の本錢十倍百倍も其く江湖の看官并の試書主人魚目とて明珠の混るるものあり莫耶と鈔刀とをの價の多かるものと亮察をて多く購ひぬるとも惟祈りまはさる已丑麥秋望荷 江戸書賈千翁軒敬白



